

## 謝肉祭の季節



ロシア・ハバロフスク市在住

岡田 和也

謝肉祭といえば、リオのカーニヴァル、シューマンやサン＝サーンスの楽曲が連想されます。或る事典に拠りますと、謝肉祭とは「西方教会の文化圏で見られる通俗的な節期」で、その語源は「一つにラテン語の carne vale（肉よ、さらば）に由来するといわれ」、ドイツ語の呼称ファストナハトなどは「“断食の（前）夜”の意で、四旬節の断食（大斎）の前に行われる祭りであることを意味する」そうですが、東方教会圏のロシアにも「マースレニツァ」という謝肉祭があり、バターを意味するロシア語「マースロ」に由来することから「バター祭」とか「乾酪の週」といった訳語があげられています。大斎（カトリック教会では“だいさい”、東方正教会では“おおものいみ”）は、復活祭（東方正教会では“復活大祭”）の前の7週間（主日を除く40日間）に亘る“キリストの40日間の断食修行を記念する”齋戒期で、その前の一週間が「マースレニツァ」です。

復活祭は「春分の日の後の満月の後の最初の日曜日」という移動祭日で、今年はロシア正教会では4月27日ですので、「マースレニツァ」は3月3日から9日にかけてとなります。ソ連時代には盛大に祝われることはなかったようですが、近年、当地では、最終日にあたる日曜日に市内の公園や郊外



2006年早春のマースレニツァ（ロシアの謝肉祭）の仮装（ハバロフスク市内のデナーモ公園で）

の森でこの祭りが催されており、グリーン（ロシア風クレープ）やシャシリーク（串焼肉）の屋台のあいだを人々がそぞろ歩いてさながら縁日の様相を呈し、冬送りの象徴である藁人形が焼かれるときに祭りは最高潮に達します。ロシア音楽にも「マースレニツァ」を扱ったものがあります。謝肉祭の人形芝居小屋で踊り子の人形に恋した人形のバトルーシュカがムーア人の人形に殺されるという筋のストラヴィーンスキ作曲のバレエ音楽『バトルーシュカ』では、覆された宝石箱のような旋律から祝祭の賑わいがイメージされますし、チャイコフスキ作曲の『四季』の2月には『マースレニツァ』という題名が付され、ヴァーゼムスキの詩『異郷でのマースレニツァ』の次の一節から採ったエピソードが添えられています。〈ほどなくにぎやかなマース

レニツァの／大衆的な酒宴が盛りあがり、／グリーンや浸酒に／受洗した世界が舌鼓を打つ。／お前のために、／正教の祖先たちの娘ロシアが／氷の滑り台を築き／昼も夜も漫ろ歩く〉。

今年が生誕135周年のバス歌手シャリヤーピンのレパートリー、セローフ作曲の歌劇『悪の力』の『エリョームカの歌（謝肉祭週）』では、合唱と共にこんな風に歌われます。〈俺は内儀さんを楽しませ、バラライカ（3弦の撥弦楽器）を手取る。／大衆的なマースレニツァ、お前は何とやってきた。／陽気さと歓びと色々な甘味と、／ピローグ（パイ）とオラーヂヤ（パンケーキ）と熱々のグリーンと、／スコモローフ（放浪芸人）とグドーク（3弦の擦奏楽器）弾きと笛吹きとバグパイプ吹きと、／大麦のビールと濃い蜂蜜酒と。〉（筆者訳）。